

本條秀太郎 さん

特別インタビュー

朗読劇と邦楽演奏が融合した新しいスタイルの舞台「邦楽ドラマ」。来たる三月、山本周五郎の小説『虚空遍歴』をもとにドラマ化した「松廼家おけい」が上演される。二〇〇九年初演時にも音楽・演奏を務めた本條秀太郎さんに、再演の意気込みを伺った。

——物語のキーパーソン・中藤冲也は真の三味線音楽を求めて江戸、上方、そして北国街道・雪の山中を遍歴します。その姿が本條さんに重なるように見えます。

——物語のキーパーソン・中藤冲也は真の三味線音楽を求めて江戸、上方、そして北国街道・雪の山中を遍歴します。その姿が本條さんに重なるように見えます。

——そんなにかっこいいものではないですよ。子どもの頃はギターをやっていたのですが、家の周りは茨城県の潮来の花街で、いつも三味線の音が聴こえてくる。自然と三味線を手にするようになった。邦楽家の家系ではなかったのですが、中学で東京で弟子入りして。その頃から

自分の道は三味線しかないと思ってきました。

——その後、民謡を再創造する「俚奏楽」を創始したり、洋楽や世界の民族音楽とのコラボレーションを行ったりするなど、積極的な活動をされてきましたね。



ほんじょう ひでたろう ●三味線演奏家、作曲家。1971年に本條流を創始。ライフワークは消えゆく民謡を復元・継承し、現代に蘇らせる「俚奏楽」。江戸末期の端唄の発掘にも力を入れる。2004年文化庁芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2007年紫綬褒章を受賞。

「虚空遍歴」というタイトルで思い浮かぶのが、仏教の「空」の心です。冲也はいつも「いや、まだ」と模索し、終わりのない苦しみと向かい合っていました。人

——純粋に三味線に向き合う姿は、やはり冲也に重なります。

これらだと思います。長唄も清元も常磐津も、音色や弾き方は違っても楽器は三味線。「三味線」というジャンルの音楽と考えればいい。こんな音も出せるんじゃない？こんな弾き方もできるんじゃない？という意欲が次々と湧き出てきました。

生は有限ですが、求めるものは永遠で終わりのないもの。冲也の「死んだ時に初めて完成する」という思いには共感できます。

——初演と再演、それぞれのような思いですか。

初演の時は大変なプレッシャーでした。冲也が作った端唄の歌詞に、公演のためにオリジナルで節回しをつけて作曲したのです。今回はそれらをブラッシュアップして、もっと深い世界に行きたいですね。

——ご自身も日頃から端唄に力を入れています。

僕はもともと長唄をやってきたんですが、端唄は邦楽の入門編としておすすです。端唄を聴いて三味線っていいなと思った方が、今度は長唄ってどんなだろうと興

味を持つてくれたらいいですね。

端唄は恋の歌が多く、古より変わらない感情を歌い上げています。特に花柳界で歌われてきたので、新しい流行を取り入れてきた。端唄の「端」は、僕は「端っこ」ではなく「端緒」の端だと思っています。流行の最先端の音楽なんだと。

——クライマックスで演奏される『雪の山中』は、一九六九年に作曲されたんですね。

俚奏楽として初めて作った、自分の中でも思い入れの強い曲です。この曲が物語の世界観に合っているということでお声がかかり、このドラマの構成が作られました。

——本條さんあってこそその「松廼家おけい」ですね。物語の面白さと、舞台上に臨む心持ちをお

聞かせてください。

冲也をめぐる四人の女性が登場します。おけいは冲也を慕う柳橋の元芸者。肝心の冲也は登場しません。不思議な舞台構成で、お客様は想像力を働かせる楽しさがあると思います。僕は演奏中、ある時は冲也になるよ

うに、ある時は単なる空気になるように心がけています。

紀尾井小ホールは出演者と観客の距離が近く、その世界に入り込みやすい空間ですね。周五郎の小説を読んでいるような感覚で、皆さんが自分なりの冲也やおけいのイメージを作り上げてくれたらと思います。

紀尾井邦楽ドラマ — 虚空遍歴(山本周五郎)より

松廼家おけい

2019年
3月6日(水) 16:30開場 / 17:00開演
3月7日(木) 13:30開場 / 14:00開演

原作 山本周五郎
演出 大間知靖子
脚本 堀越真 美術 松野潤
音楽 本條秀太郎 語り 本山可久子

全席指定 7,000円

〈紀尾井ホールチケットセンター〉
TEL 03-3237-0061
(10:00 ~ 18:00日・祝休)

紀尾井小ホール

紀尾井ホール 5F

主催：公益財団法人 新日鉄住金文化財団
千代田区紀尾井町6番5号 <http://www.kioi-hall.or.jp>



山本陽子(おけい役) 磯西真喜(お京役) 岡本瑞恵(お幸役) 今村祥佳(おなつ役)



果てなき三味線の道を求めて